



Title	EXPO' 90に寄せて
Author(s)	宮本, 敏夫
Citation	makoto. 1990, 70, p. 2-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85967
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

EXPO '90 に寄せて

財団法人 国際花と緑の博覧会協会

植物管理部植物管理課専門役 宮 本 敏 夫

1. 花の万博の開幕

平成2年4月1日から9月30日まで183日間開催される花の万博の主役は何といっても「花と緑」です。甲子園球場の35倍もある広大な会場は6カ月の会期中様々な「花と緑」でつつまれ、海外各国や国内各企業等の庭園・花壇が出展されます。とくに野原のエリアの大花壇を中心に山のエリアの園路沿いの花壇や、街のエリアの立体花壇などでは会期中絶え間なくいろいろな「花と緑」が美しさを競い、楽しみながら「花と緑」の知識を豊かにすることが出来ます。

また、国際園芸博に欠くことの出来ない“花と緑”のコンテストやショープログラムなど、様々な催事も開かれ、その楽しみはより大きなものになるでしょう。

2. 花と緑の演出のあらまし

1) オープニング(4月上旬～4月中旬まで)

イメージ……うらら

満開のサクラ、ツツジや樹々の芽吹きをはじめ、草花ではパンジー、サクラソウ、スイセン、アイスランドポピー、マーガレット、チューリップなどが咲き乱れ、花博を盛り上げます。

2) 春(4月下旬から5月中旬まで)

イメージ……らんまん

春の最盛期から初夏へうつる樹木、ハナミズキ、ボタン、ハナズオウや、芝生の新緑、エビネ、シャクヤク、コマクサなど色とりどりの花が見頃です。

3) 初夏(5月下旬から7月上旬)

イメージ……育み

樹木の盛んに成長する姿や、梅雨に映えるアジサイ、バラ、ハナショウブ、クレマチスなど、多種多様の花が見られます。

4) 盛夏(7月中旬から8月下旬まで)

イメージ……トロピカル

ハイビスカス、ムクゲ、ブーゲンビレア、サルズベリ、クロトンなど、照りつける太陽のもとで美しい色彩を競い、水や緑蔭とあわせて明るく彩ります。草花ではヒマワリ、カンナ、サルビアなどが咲きつづけます。

5) フィナーレ(9月上旬から下旬)

イメージ……実り

リンゴ、ブドウが実を結び、ハギ、キク、コスモス、リンドウなどの花々がフィナーレを飾るとともに、訪れる初秋の気配を感じさせます。

3. 花と緑の見どころ

1) 山のエリア

会場の北東部に広がる「山のエリア」では国内はもとより海外各国のいろいろな庭園や花壇が楽しめます。

鶴見新山南麓の「政府苑」を中心に、東北側には、国内庭園展示場が園路沿いに配され、国内の造園、園芸団体、企業や公共団体等34出展者による「テーマ庭園、花壇」が一区画200～1,200㎡となっています。このゾーンは「日本の庭」、「夢の庭」、「生活の庭」の3つに区分され、「日本の庭」では、日本の伝統的造園手法を活した日本庭園の美しさを紹介します。「夢の庭」では過去のパターンにとらわれずに自主的な発想をテーマとした夢、未来、メルヘンの庭を紹介します。

さらに「生活の庭」では日常の暮らしや、趣味など生活に深くかかわる庭が提案されています。

また「スポットガーデン」では国内の45道府県のほか50の団体が40～120㎡のスペースを使って、それぞれの地域に関連した花と緑で小面積の庭園が出展されます。

一方「山のエリア」の西部は海外各国の出展による「国際庭園展示場」(世界の庭)は、欧州、アジア、北米、大洋州、中南米、中近東・アフリカの各ブロックに区分され、世界各国の伝統的な造園技術

が披露されています。

ここではそれぞれの国の文化、観光コーナーもつくられ、文化交流の場として期待されています。

これらの出展庭園、花壇を巡るために4kmに及ぶ園路がつくられていますが、この園路沿いには約1ヘクタールにのぼる花壇が花博協会の手でつくられています。これらはそれぞれ出展された庭園や花壇との調和を考えたデザインの花壇がつづきます。ここでは内外の稀少植物を主力とした多数の宿根草や、1、2年草、球根花き、山野草、花木等がそれぞれのシーズン毎にローテーションされて植えられています。なかでも約700mの延長をもつ主園路沿いには、このエリアのテーマである自然性を演出するために300種以上の宿根草が植えられており、野趣に富んだ花壇を楽しめます。このような宿根草を主力とする花壇は、欧米では数多く見られますが、今回の花博では日本の風土性をベースにして宿根草だけでなく、葉の美しい常緑の低木や1年草も加えたこの花壇が花博方式として見どころといえます。

2) 野原のエリア

会場の中央にあるいのちの海とその周辺のゾーンで、ここでは広さ約2ヘクタールにのぼる「大花壇」に60万株の花や緑が植えられています。

そのうち約1ヘクタールの「花の谷」では、日本の田園風景がコンパクトにまとめられており、「せせらぎ」に沿って「段々お花畑」がつづき、ゆっくりと花と緑の散策を楽しめます。杉木立でつくられた「峠」、桜や花園などが織りなす「里山」、竹が生い茂る「藪」など、日本の自然が楽しめます。そこには内外の珍しい草花や花木が多数植えられています。

「花栈敷」には円形、階段状、スロープ状の花壇などユニークなスタイルの花壇がつくられており、各シーズン毎に多数の花がフラワーパレットやプランターに植えられて展示されます。そこでは会期中郷土色豊かな様々なイベントが開かれますが、この際にはこれらのパレットの一部を移動し、そこは華やかな舞台に変わります。これらの演出は「花の歳時記」によって構成されます。

今回の花博でつかわれるフラワーパレットは一辺45cmのユニットプランターで、広場がイベントに

つかわれた場合、一夜のうちに広場を花壇に仕上げようという作戦の主役になるわけです。この正方形のパレットを敷きつめたときは、底のパイプをつないで土中から灌水できる装置もつくられています。このようなプレハブ花壇も花博方式の特色だと云えます。

「国際展示光の館」では、内外の鉢植花き等の短期間の屋内展示やコンテストが行われています。ここではグランドオープニングショーから、グランドフィナレショーにいたる16のショーテーマによって「花と緑」の展示が会期中行われており、四季の花の香りがホールにいっぱいです。

「国際展示大地の館」でも全期間にわたって植物展示が行われており、切花や鉢花・フラワーアレンジメントなどのコンテストが催されています。

大阪府が出展する「いちょう館」では最新のビジュアルな技術を駆使して、古代の森から未来都市までを体験させてくれます。なかでも古代の引木具「修羅」や藤ノ木古墳から出土した金銅製冠は圧巻です。またSFマンガ家の松本零士氏をアドバイザーとして描かれた未来都市。大阪の姿は香りと振動が一体となった体験映像で楽しむことが出来ます。

3) 街のエリア

会場の南西部の「街のエリア」は展示施設や催事施設がつづくバビリオン地区と夢と楽しみにあふれるアミューズメント地区で構成されています。

バビリオン地区では世界中の美しい花や緑、大自然の姿、自然と調和する暮らしのあり方などをハイタッチ感覚で演出した参加型の映像で展示によって体験させてくれる様々なバビリオンが建ち並んでいます。

アミューズメント地区はヨーロッパの祭りの雰囲気が本格的に演出される「キルメスゾーン」と、大型遊戯施設を中心とした「パークゾーン」に区分されて、国際的な交流の場として新しいアミューズメントと云えます。

このエリアでは観客の滞留と移動がスムーズに行われるように街路や広場が広くとられています。この花壇にとっては、これらのファニチャーや構造物と一体となったプランターやバスケットが主役となった立体的な花壇、花飾りの演出を楽しめま

す。

ハンギングバスケットの場合、花や緑を地上から空中に持ち上げるのですからその管理条件も変わってきます。立体的花壇にとってはその栽培容器のデザインや、素材のもつ機能性・用土の理化学性、灌水技術等は勿論、そこに植えられる花や緑の種類の選択が成否のポイントになります。ここでは一般的な草花のほか、熱帯植物、つる性植物、小花木等多数が植えられています。これらの花や緑の植え込み用土としては粒状のロックウールとピートモスの混合したものがつかわれており、灌水は半自動式のドリップタイプ方式が採用されています。

「国際展示水の館」では国際園芸博で欠くことの出来ない花と緑のコンテストが行われ、全期間にわたる植物展示をはじめ、切花や鉢花、フラワーアレンジメントなどのコンテストがくり広げられている。「世界の花緑」、「日本の花緑」、「生活の花緑」の3つのショープログラムが展開されている。

さらにスイレンの花をイメージした「咲くやこの花館」(大阪市出展)では約2,600種、15,000株の“花や緑”が植えられています。大温室の中央部にはフラワーホールがつけられ、いろいろなイベントも楽しめます。

4 珍しい花を楽しむ

花博へ行って世界中の珍しい花や緑を見たいという期待に答えて、会期中数多くの珍しい花が展示されます。花博協会では学識経験者の助言をえて約200種をリストアップし、3年前から養成をはじめており、会期中約10万株が花壇に植えられています。

たとえば宿根草としては135種あり、そのうちヨーロッパ原産135種、北米産18種のほか中国、アフリカ、インド、ヒマラヤ、中南米などのほか、日本原産も43種加えて「山のエリア」を中心に花壇やプランターに植えられています。



クリスマスローズ



肥後ジャクヤク

さらに熱帯植物としては55種あり、ブラジル原産6種、南アフリカ5種、メキシコ6種のほか熱帯アメリカ、インド、オーストラリア、コンゴ、タイ、ハワイ等原産ものや、園芸種が含まれています。

そのなかから話題性のあるグループを紹介するとつぎのとおりです。

1) メコノプシス・ベトニキフォリア

ヒマラヤの青いケンとして国際的に知られており、海外の園芸博でも人気ものの1つです。今回の花博用としてはタネをイギリスからとり寄せて北海道で養成したものを「山のエリア」の花壇に植えてあります。

北海道では6月15日～25日が開花期となっていますが、花博では4～5月のゴールデンウィークに花を薬しめします。青色で花径4cm位、チベット、北ビルマ、雲南に野生している宿根草です。

2) プロテア・キナロイデス

原産は南半球でプロテアを国花としている南アフ

リカ共和国にもっとも多く、オーストラリア、ニュージーランド等でもみられます。

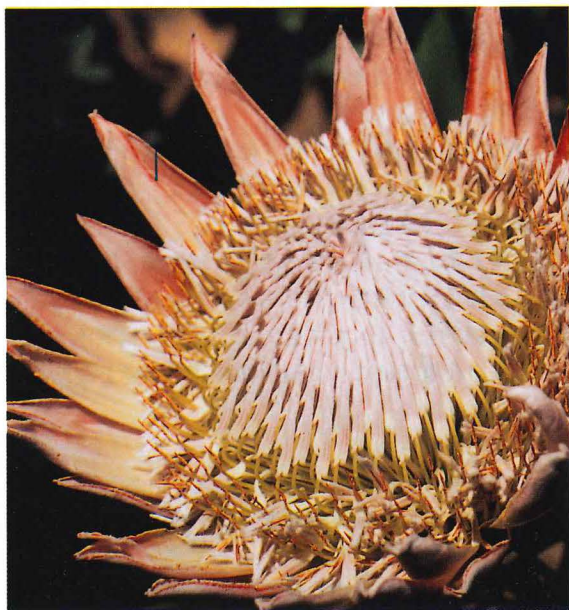
常緑の低木ですが子供の頭ほどもある大輪の花が咲いている姿には眼を見張ります。

すでに海外からは切花として輸入されていますが、花博用としては、静岡県下で切花生産に成功している開花株を鉢上げし、花の谷の花壇に植えられています。

3) ダーリングトニア・カリフォルニカ

サラセニア科の食虫植物で、アメリカオレゴン州西部、カリフォルニア州北部の標高1800mまでの湿地に自生しています。

サラセニアと同じ筒状葉ですが、ほぼ180度によじれて立ち上がり、筒の上端はフード状にふくらみ、その先が2片に分かれてカイゼルひげのようなので奇異な姿です。遠くから見るとコブラが鎌首を持ちあげたような姿を連想させるためにコブラリリーと云われています。花の谷の花壇に植えられています。



プロテア・キナロイデス



ギボウシ

4) 肥後ジャクヤク

熊本県には古くから肥後六花があり、それぞれ純系品種の保存のために趣味園芸家を中心に地道な研究保存活動が続けられております。花は大輪で一重咲き、花の芯部に鮮黄色の雄シベが盛り上った梅心です。花色は白、桃、赤色の3系統で、それぞれ濃淡があります。開花期は4月下旬～5月上旬で、花の谷の花壇に植えられています。

5) テロペア

オーストラリアに自生するこの花には悲しい伝説があります。昔、クルビーという名の娘が戦に出たまま帰らない恋人を待ち焦がれ悲しみのうちに息絶えてしまいました。この娘の涙が落ちた跡から1本の木が生えて花が咲きました。この花は娘がまっていたロック・ワラビーの毛皮のように赤く美しく輝いていたといわれています。人々はこの木をワラタ(赤い花の木)と呼んだそうです。テロペアは枝の頂上部に高さ10センチ、直径10センチの大きい花をつけます。管状の花弁がマツカサのように重なり合って球形になり、大菊の厚物咲きにそっくりです。学名のテロペア・スベキオシツシマは「遠くからも見える」という意味です。花の谷の花壇にプロテアとともに植えてあります。

6) エーデルワイス

アルプスの花エーデルワイスはミュージカルのなかでも歌われており、園芸愛好家以外のひとにも広く知られてきました。しかし実際にこの花を見たひとは案外少いようです。

花博ではこの花を多くのひとに楽しんでもらうために、山のエリアのロックガーデンに植えられています。

開花期はアルプスなどの自生地では6～8月ですが、花博では4～5月になります。

この花は株全体が雪で覆われたように細い綿毛に包まれているところからエーデルワイス(高貴な白)と呼ばれているのです。

7) コマクサ

エーデルワイスとともに登山家や山草趣味家の憧れの的の花です。この花が大群落をつくらずにひっそりと咲いている姿は孤高な女王にもたとえられています。コマクサの名前の由来は、咲いている花の

形が馬の顔に似ているからです。この花は我が国の中部以北の高山に分布し、冷涼な気候を好みます。花博では山のエリアのロックガーデンに植えられていますが開花期は4～5月でこの高嶺の花を楽しんで下さい。

8) クリスマスローズ

ギリシア、トルコ原産のこの花は春咲クリスマスローズともいわれ、4～5月に山のエリアで楽しめます。この花は一重咲でバラの花型、花色は濃桃、白、緑地に紫の縞などです。花茎は高さ30～40cmで俯き加減の花が葉に見え隠れして咲く姿はなかなか風情があります。

9) アデニウムオベスム

この花は荒涼とした砂漠の厳しい自然に耐えて咲いており、英語では砂漠のバラ(Desert rose)と云われています。アラビア、エジプトからタンザニア等東アフリカに分布していますが、花色は濃紅色、花筒部が白く花卉の縁は濃色となります。

またこの植物は幹の根元が壺状に肥大しています。これは砂漠の不良環境を生きぬくための養分貯蔵庫です。このような植物を壺植物と呼んでいます。この根元が肥大する現象は種子から養成した株のみで、挿木した苗では現われません。

10) グロッパ

この花は東南アジアなどに広く分布しています。花博でつかわれるものはタイ原産で、“シャムの舞姫”として話題となっています。

葉も茎も柔らかな笹のような草木で、茎の先端から淡紅色又は紫色の花びらのようなものを疎らにつけた穂が垂れ下った咲き方で、花色は鮮黄色です。盛夏の花壇ではこの異国情緒の花が話題となることでしょう。

11) ヘリコニア

ヘリコニアは中南米熱帯の花です。珍しい花型と鮮やかな色彩で盛夏の花壇でトロピカルムード演出の主役となることでしょう。

その代表的なものとして次の3種が植えられます。

(i) フミリス

“Robster's claw”(エビの鉗)という英名があります。鮮やかな赤色の萼はオマールえびの鉗のような形をしています。中米トリニダードトバゴ

共和国の国花です。

(ロ) プシッタコルム

英名“Parrot flower”(オウム花)、赤色の萼や黄色の花弁がオウムを思い出します。

(ハ) ロストラータ

オウムのくちばしのような形をした花が赤色の花穂に2列に並んで長く下垂します。

12) ギボウシ

日本を中心に中国にも自生している宿根草です。日本では江戸中期から園芸化が進み、各地で白色や黄色の斑入りものがつくられ人気を博しています。なかでもスジギボウシ、トクダマ黄覆輪等は知られています。

ギボウシの品種としては、野生種が40数種、斑入り種が20数種、アメリカで作出された園芸種は100種以上といわれ、グランドカバーとして国際的にも注目されています。

花博用としてはそのなかから24種を選び花壇に植えていますが、その葉の色彩を楽しみください。

13) ラフレシア

世界最大といわれるこの花は“標本”として政府苑の自然・科学棟に展示されています。

赤黄色に白い斑点のある肉厚の5弁の花で大きいものは直径1.5 m、重さ10キロもあるといわれています。

熱帯雨林のつる性植物に寄生して養分を補給、葉や茎、根などは退化しており外見上は花だけです。2～3日で枯れてしまうため開花している姿は現地でも殆んど見られず、採取も禁止されています。

展示している標本は直径80センチでインドネシア政府の特別許可で、昨年2月スマトラのジャングルで採取し、冷蔵して日本に空輸されてきました。

色落ちや腐敗を防ぐために冷凍乾燥処理し、アクリル系樹脂で直径90センチ、高さ45センチの半球体に封じ込んであります。

自然状態を出すため、花の下には熱帯樹の落ち葉を敷きつめてあります。



Edelweiss.
(エーデルワイス)